

3. 「山梨・八ヶ岳南麓フィールド・トリップ(地域活性化ワークショップ)」の実施

3.1. 位置づけとねらい

山梨・八ヶ岳南麓フィールド・トリップは、地域社会イニシアティブ・コースの講義「地域活性化ワークショップ」の一環として企画されたものであり、修了生の活動組織である信大地域フォーラムとも連携して実施された。このフィールド・トリップのテーマは、「山梨・八ヶ岳南麓の湧水にみる水利史と地域活性化アイテム」である。具体的には、八ヶ岳南麓・小淵沢の周辺の湧水やアルソア化粧品本社を訪問して、地域で活動する営利企業のさまざまな実践について学ぶものである。さらに、小淵沢の種苗会社ミヨシで、栄養繁殖性植物の種苗生産について説明を受け、意見交換を行った。途中、地元の湧水スポットである三分一（さんぶいち）湧水を見学し、湧水利用についての意見交換を行った。

3.2. 実施要領

■日程

2008年7月12日（土）

■行程

- ・ 小淵沢駅集合
- ・ (株)アルソア化粧品本社周辺を散策
- ・ 井詰湧水の見学
- ・ 「ルラシュ癒しの杜」内のレストランで昼食
- ・ (株)アルソア化粧品本社を見学
- ・ 三分一湧水見学
- ・ (株)ミヨシを見学、現地解散

■参加者

教員3名、院生9名、修了生2名の計14名

3.3. 実施内容

(1) (株)アルソア化粧品本社周辺を散策

7月12日（土）11:00から1時間弱、地域社会イニシアティブ・コースの修了生であり、(株)アルソア化粧品の社員でもある手島康二氏の案内のもとで、(株)アルソア化粧品本社周辺を散策した。まず立ち寄ったのは、小淵沢ウェルネスガーデンである。小淵沢ウェルネスガーデンは、ウェルネスなライフスタイルを学ぶための本格的な空間である。ウェルネススタイルとは、美しく健康な生き方をめざす新しい生活スタイルのことである。学習・体験するための施設としての環境を整え、小淵沢の豊かな自然を舞台に多種多様なウェルネススタイルを提供する施設になっている。ミュージシャンが録音に使っていた建物だったが、それを改装して、一階をレストラン、二階を研修施設にした。食事療法のマクロビオティックにもとづく料理教室、カフェ&スイーツを提供するレストランにもなっている。



次に立ち寄ったのは、アルソア野外劇場である。アルソア野外劇場は、アルソアのある小淵沢町が主催する音楽イベント北杜市音楽祭（旧こぶちざわ音楽祭）のために建設された。とりわけ国際音楽祭で頻繁に利用され

ている。(株)アルソアでは、本社を小淵沢に移転して以来、このイベントに協賛しており、社屋を開放してコンサートを開催している。アルソア野外劇場は、そのような(株)アルソアの地域への協力姿勢の象徴でもある。



散策では、この他にも、(株)アルソア化粧品の女子寮などを外から見学した。そこでは、その女子寮が、東京から移転してきた女性社員が利用するものであることや、全部で24部屋あり、主な入居者は年配の女性や家族づれであるといった説明がなされた。また、井詰湧水の上部に位置するため、湧水の水質に多少の悪影響を与えていると考えられることなども説明された。以前、湧水の水は飲用できたが、近年は飲用に適さない年もあるということであった。

(2) 井詰湧水を見学

続けて、井詰湧水付近を散策し、湧水を見学した。井詰湧水付近には、平安時代中期の頃のものとして伝承される段々畑が広がっており、井詰湧水側から見上げると、今もその形状を観察することができる。この付近に集落があったと考えられるが、学術的な根拠はないとのことである。しかしながら、その形状から、人工的に作られたことだけは、間違いないと考えられている、といった説明がなされた。



ひととおり、周辺付近を散策した後、モミの木湧水という通称を持つ井詰湧水そのものを見学した。井詰湧水は、山梨県の天然記念物に指定されている樅の木の巨木の根元から湧き出る清水である。そのため、別名モミの木湧水と呼称されている。この湧水は、古い時代から旧小淵沢村を潤してきたと考えられている。また、湧水の前には石垣が広がっており、それは、神社の建物の跡ではないかと考えられている。モミの木は、樹高50m、樹齢500年、樹幹5.70mであり、井詰神社が天仁2年正月に、神社本殿を創建した際に、ご神木として植えられたもので、樹齢、樹高とも県下にその類を見ないご神木であることを説明していただいた。



さらに、(株)アルソア化粧品の環境保全活動における取り組みについて、説明していただいた。(株)アルソア化粧品では、このような自然環境を保全するために全国でゴミ拾いのボランティア活動を展開しているとのことである。年に一度の八ヶ岳南麓のクリーンアップのイベントには、社員全員が参加できるように会社が配慮しているといった取り組みが示された。また、そのイベントでは、合わせてどんぐりを拾い育てる、「八ヶ岳歩こう会」や「景観を保存する会」など、地元に関連する活動をしている会の方をゲストに招きガイドしてもらおう、いわゆる交流会を開催して、面白みを加える工夫をしているとのことであった。このように会社ぐるみで活動を始めることになったきっかけは、経営層が言



い出したことによるという。地球環境保全に一役買おうという単純な発想と、地域への貢献とが結びついたということである。河原や海岸を美化する活動も、企業の理念に沿った行動だということでも力を入れているとのことであった。

(3) 「ルラシュ癒しの杜」内のレストランで昼食

(株)アルソア化粧品の本社周辺を散策した後、「ルラシュ癒しの杜」内のレストランで、13:00 すぎから昼食をとった。「ルラシュ癒しの杜」の正式な社名は、「(株)アルソア本社 ルラシュ癒しの杜事業」である。2007年3月に、(株)アルソア本社内に滞在型健康施設事業として、発足された。化粧品、健康食品、浄水器の研究開発製造販売などを主な事業内容としている。それは、「八ヶ岳山麓の豊かな自然と一体となった、カラダと心身の美しいバランスを取り戻す、新しいタイプのリゾート施設」である。「ルラシュ癒しの杜」では、ナチュラルフードプロデューサー監修の下、おいしくヘルシーなマクロビオティックのメニューが用意されている、ということであった。

また、レストランに移動する途中で、(株)アルソア化粧品の本社周辺に位置し、農業用のため池として利用されてきたすずらん池を訪れた。すずらん池は、平成14年に周辺環境整備を行い本格的な公園として生まれ変わったものであり、四季折々の自然が楽しめる憩いの場所として、周辺住民や(株)アルソア化粧品の社員に利用されている、という実態が説明された。湧水の水をそのまま田んぼに流すと冷たすぎるので、八ヶ岳にはこうしたため池が数多くあるという説明を受けた。



(4) (株)アルソア化粧品本社を見学

「ルラッシュ癒しの杜」で昼食をとった後、(株)アルソア化粧品本社に移動した。14:10 ごろから、地域社会イニシアティブ・コースの修了生であり、(株)アルソア化粧品の社員でもある手島氏により、ひきつづき、(株)アルソア化粧品のコンセプト、コンセプトを表現した本社社屋、アルソア型ビジネスの特徴などについて説明していただいた。

まず、(株)アルソア化粧品のコンセプトについて説明していただいた。(株)アルソア化粧品は、1998年に本社・社員とともに東京から小淵沢に移転することで、外部に向けて同社が発信しているコンセプト「自然と調和した暮らし＝アルソアライフスタイル」を実践しているそうである。(株)アルソア化粧品のいう「自然と調和した暮らし＝アルソアライフスタイル」とは、自然と一体化し、自然に学ぶ姿勢のことであり、それは、「自然の恵みに感謝し、生命の息吹を感じ取る心の豊かさ。自然体の生き方を提案し、実践すること。自然環境に目を向け、常に最上を目指して社会に貢献する決意。さまざまな絆を深め、心をひとつにして、実りの多い人生を実現すること。そして、自分の中の無限の可能性に気づき、行動によって自信を深め、内面から美しくなること。その歓びを多くの人とわかち合い健康美に輝くこと」を具体的に意味している。このような(株)アルソア化粧品のコンセプトについてのベーシックな情報を教えていただいた。



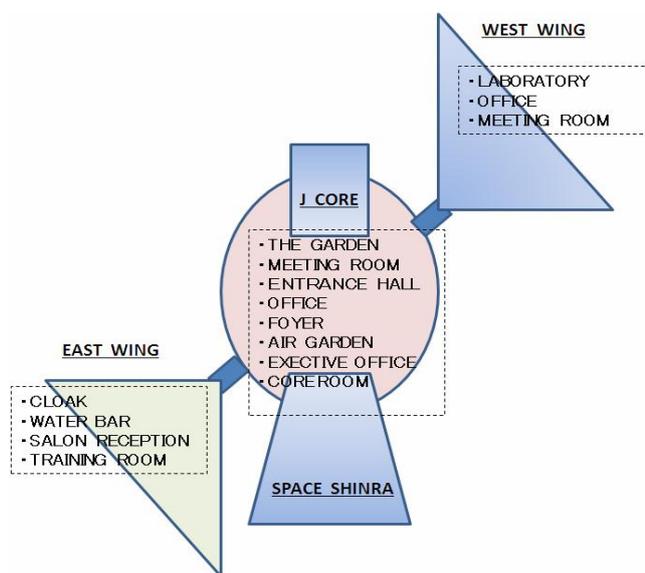
さらに、具体的な取り組みについても教えていただいた。例えば、(株)アルソア化粧品は、「心」「体」「肌」の3つの健康づくりから本当の美しさが生まれるという考えの基に、近年では体の内面からの美しさを引き出す健康食品の開発・販売にも力を入れているということである。売上げの主軸である化粧品は、肌の自然治癒力を引き出すことを主眼に置き、自然成分をベースとして開発されている。同社は「自然派化粧品」の先駆的メーカーでもあるとのことであった。最近の調査では、消費者の8割が自然派と銘打った化粧品しか買わないという結果が出ており、従来は、海外の化粧品ブランドがもてはやされた時期もあったものの、現在では自然派が主流になっている。そして、アルソア化粧品では、1972年の創立以来自然成分にこだわってきたという。いわば、アルソア化粧品の経営コンセプト「自然と調和した暮らし＝アルソアライフスタイル」の提案・発信は、ビジネス戦略としても成功を収めてきたと言える。手島氏により、このような会社の実践についても説明していただいた。



また、同じことが、「水」をテーマに事業フィールドを広げる実践にもあてはまるという。(株)アルソア化粧品では、「あらゆる生命活動の根源である『水』を媒介として、さまざまな自然のエネルギーを、いかに人間の健康や美へフィードバックさせるか」というコンセプトのもとに、数々の製品を開発してきているということであった。

さらに、手島氏により、このような社屋についての説明をしていただいた。(株)アルソア化粧品の本社は、小淵沢駅から車で10分程度のところに位置する。設計を担当したのはイタリアの世界的な建築家マリオ・ペリーニ氏である。コンクリート打ちっぱなしの壁面を持つ特徴的な建物は、一企業の施設と言うより、文化的な公共施設の迫力をもつ。自然との調和がコンセプトにもなっており、働く人や訪れる人に空間のパワーを感じさせるデザインとなっている。1998年の山梨県建築文化賞、1999年の日経ニューオフィス賞の環境奨励賞、1999-2000グッドデザイン賞（施設部門）などを受賞してきているとのことである。

その建物全体は、鳥が翼を広げてはばたいているイメージである。真ん中に胴体にあたる丸い建物があり、東側と西側にそれぞれ三角の翼を広げたウィングと呼ばれる三角形の建物がある。ウェストウィングが、研究所の建物となっており、それに対して、イーストウィングは研修棟になっている。また、SPACE SHINRA と呼ばれる建物が鳥のしっぽにあたり、アルソアという社名のロゴはこの部分に付いている。



社員用レストランである「ザ・ガーデン」も訪れた。「ザ・ガーデン」は、アルソア本社で勤務する社員約200名の昼食と、全国から研修に訪れる販売員やゲストのために食事を提供する、企業としては初めて徹底してオーガニックを取り入れた食堂であった。昼食は、栄養バランスのみならずマクロビオティックのコンセプトにもとづき、オーガニックの食材を用いた日替わりプレートなどが提供されているという、ベーシックな情報について、手島氏より説明していただいた。さらに、オーガニックを社員食堂に取り入れることは、仕入先の開拓とそのコントロールの難しさ、材料コストがかかること、メニューの開発、下処理に手間がかかることによる人件費の問題や、スタッフの教育などオーガニックならではの問題があり、企業として実現するのは大変なことである。だが、(株)アルソア化粧品では、考え方に賛同してくれる有機農業生産などのグループや食や健康に関心の高い小淵沢町の婦人団体、オーガニックレストランのプロデューサーなどの協力に恵まれ、オープンにこぎつけた、という経緯についても説明していただいた。

その後、社屋内部を巡る見学ツアーを実施した。(株)アルソア化粧品の社屋の形体は非常に凝ったものとなっている。社屋の中心には、コア・ルームと呼称される多目的な中枢空間があった。楕円立体の形をしており、鳥の卵をイメージして設計されたもので、会議などで実際利用されるという説明がなされた。また、社員の交流の場として、エア・ガーデンと呼称される中庭が設置されている。中心には水が張られ、周囲にひとが巡れる回廊を配した伝統的な地中海建築の様式の空間となっていた。水を抜き、芝生を張れば、南アルプスが一望できる特設の屋外ステージにもなるので、こぶちざわ音楽祭にも利用されているとのことであった。



また、その他にも、ガラス張りの壁面から、水の張られた中庭、南アルプスまでの眺望が楽しめるように設計され、雨天の際、音楽祭の会場にもなる多目的ホール、スペース・シンラが、手島氏によって紹介された。さらに、全国に展開するアルソアサロンを体験できるスペース、「ねむの樹」についての説明もしていただいた。その空間は、窓辺から外の樹木が眺められるよう設計されている。さらに、洗顔やメイクアップ、プッシュ美颜などのデモンストレーションができる場として活用されているとのことである。ちなみに、アルソアとはフランス語でねむの木を意味すると述べられた。



(5) 三分一湧水見学

(株)アルソア化粧品本社社屋を見学した後、三分一（さんぶいち）湧水のある場所へと移動した。15:10 ごろから、引き続き、地域社会イニシアティブ・コースの修了生で(株)アルソア化粧品社員の手島康二氏により、三分一湧水について説明していただいた。

三分一湧水のある場所は、公園として整備されており、木立に囲まれているため夏でもヒンヤリとして涼しく良い休憩場所になっている。2003 年、遊歩道、木道、湿地植物の保護地などが作られ再整備されたそうである。

三分一湧水は、1日に約 8,500 トンという豊富な水量を誇る湧水を農業用水として利用するための堰で、戦国時代の頃、水争いをしてきた 3 つの村に等配分するために武田信玄が築いたという伝説がある。この伝説は誤りと言われるが、湧水利用を巡り長年続いた争いを治めるために均等に分配するよう工夫されたことは事実だということである。今でも堰の真ん中には三角石柱が設置されており、三分一湧水は、八ヶ岳の自然の恵みのシンボルであると共に、古くから地元の人々が代々大切な水を分かち合ってきた知恵でもある、という。

三分一湧水の水温は、年間通して摂氏 10 度前後で、昭和 60 年に環境庁が選定した「日本名水 100 選」にも選ばれている。水路が合流する枡なかには、水を平等に三等分するための三角の石柱が置かれているのを見学することができた。



(6) (株)ミヨシを見学

三分一湧水を見学した後、地域社会イニシアティブ・コースの大学院生である宮守代利子の案内により、(株)ミヨシを見学させていただいた。(株)ミヨシは宿根草などの栄養繁殖性植物の種苗生産で有名な種苗会社で、近年は種子繁殖性の植物の種苗生産にも力を入れている。組織培養施設を持っていることから、培養用の親株生産をハヶ岳研究開発農場で行い、大量増殖苗生産は台湾の合弁会社で行っている。近年は、宿根草を取り入れたガーデンの展開をしており、ミヨシのカーネーションファクトリーの入り口には様々な宿根草が栽培・展示してある「ペレニアルガーデン (宿根庭園)」がある。園芸業界に於ける開発型企業としてオンリーワンとなる種苗会社を目指す会社である、と説明された。

(株)ミヨシでは、カーネーションファクトリーやペレニアルガーデンを見学させていただき、その後、院生と(株)ミヨシの社長とのあいだで、種苗生産の実態についての質疑がなされた。その後、現地解散となった。

